『モンテ＝クリスト伯爵』と『千夜一夜物語』

Le Comte de Monte-Cristo et *Les Mille et Une Nuits*

余語毅憲
Takenori YOGO

『モンテ＝クリスト伯爵』（1844-1846）には、デュマの読書体験――ウォルター・スコットやゲーテ、シラー、バイロン等々の作品――がその内容や形式に色濃く反映されているが、その中でも有力なものの１つである『千夜一夜物語』を本論文では取り上げ、その世界がデュマの小説の中にどのように表れているのかを検証し、さらにはこの物語集の世界を借用することで彼が何を期待したのかを分析し明らかにしたい[1]。

船乗りシンドバッド

アレクサンドル・デュマが私生活で麻薬を服用していたか否か、またパリのピモダン館で1845年頃から数回にわたり開かれたハシッシュ・クラブに彼が参加したことがあったか否かについては、それらの体験を証拠付ける資料が今日において不足しており、真実を知る術はない。しかし『モンテ＝クリスト伯爵』の主人公、復讐に燃えるエドモン・ダンテスは不眠症のために阿片とハシッシュで出来た調合薬を日常的に服用する、いわば薬物常用者であった。

> 「おお！もちろんです」とモンテ＝クリスト、「別に秘密にする必要もありません。それは、確実に純度の高いものを得るために私自身が広東まで行って入手した上質のアヘンと、東方、つまり、ティグリス川とユーフラテス川の間の地域で収穫された最高のハシッシュを混合したものです。この２つの成分を同量混ぜ合わせて、丸薬のようなものにし、それを必要なときに飲むのです。10分後に効果は表れます。フランツ・デピネ男爵にお尋ねになってごらんなさい、彼はいつかそれを試したと

[1] 本主題を論じた先行研究として、次の論文を挙げておく。Julie Anselmini, « De Galland à Dumas. La Métamorphose romanesque du conte oriental », *Féeries*, n° 2, 2004-2005, Université Stendhal-Grenoble 3, UMR *Lire* (Lyon), p. 209-227.

思いますよ[2]。

そして誇らかに、言葉をこう続ける。「私は本当の自分の楽しみをそれにふさわしくない手に委ねることはしません。私はかなり化学の知識がありますので、この丸薬は自分で調合します[3]。」

舞台は1838年初頭のイタリアである。2人の若者――アルベール・ド・モールセールとフランツ・デピネは、ローマで行われる謝肉祭（カーニヴァル）を見物する前にフィレンツェに立ち寄る。謝肉祭までに残されたほんの僅かな時間を有効に利用するべくフランツは、同じ理由でモールセールがナポリへと向かった間、滞在していたフィレンツェの街巡りをする。それにも飽きた彼はある日、エルベ島へ狩りをしに行ったのだが、結果は芳しくない。更なる狩りの成果を求め、フランツはガエタノに新たな行き先、モンテ＝クリスト島行きを指示する。この無人の小島は、海賊や密輸入者の一味が隠れ住んでいると噂されていたのだが、フランツと彼に同行した水夫たちは島の陸地部分に篝火（かがりび）のようなものを見付ける。好奇心に駆られた若き男爵はこの岩だらけの小島に上陸することを決める。到着すると、彼は篝火の前に坐る男たちに迎えられ、島の長（おさ）と呼ばれる謎の人物からの夕食の招待を告げられる。目隠しをされたフランツが連れて行かれたところは、大きな洞窟を利用して作られた、謎の人物の住処であった。そこは異国趣味的（エキゾティック）な装飾品で埋め尽くされ、御伽噺に登場する宮殿を思わせる壮麗な屋敷であった。洞窟の中とは思えないような邸内を見て、この招待を受けた若者は驚嘆する。

> 部屋全体に地が深紅で、金色の花の刺繍のあるトルコ布が張られていた。奥のほうには一種の長椅子が置かれ、その上部には金めっきした銀の鞘と宝石が嵌め込まれてまばゆい柄のアラビアの剣が交叉して架けられていた。天井からは形も色も洒落たヴェネツィアガラスのランプが下がり、足下にはトルコ絨毯が敷かれて、踝まで沈み込みそうであった。フランツが通った入口とすばらしく明るい照明のある次の間に通じる入口には仕切り幕が掛けられていた[4]。

周囲に「船乗りシンドバッド」と自身のことを呼ばせている人物は、この若い男爵を恭し

---

[2] *Les Grands Romans d'Alexandre Dumas. Le Comte de Monte-Cristo*, édition établie par Claude Schopp, Paris, Robert Laffont, coll. Bouquins, p. 442-443, 1993（アレクサンドル・デュマ、『モンテ＝クリスト伯爵』、大矢タカヤス訳、新井書院、オペラオムニア叢書1、2012年、p. 545［以降、「大矢訳」と記す］、『モンテ・クリスト伯』、山内義雄訳、岩波文庫、第3巻、1956年、p. 146［以降、「山内訳」と記す］）。なお、本文中の引用の邦訳は、大矢訳を使用した。

[3] *Ibid.*, p. 443（大矢訳、p. 545-546、山内訳、同上、p. 147）。

[4] *Ibid.*, p. 298（大矢訳、p. 377、山内訳、第2巻、1956年、p. 236）。

く屋敷に迎え入れ、素晴らしい御馳走の数々でもてなす。夕食後、シンドバッドの使用人であるアリが「デザート」と称して、朱の小鉢を２人に運んで来る。「それでは教えてさしあげましょう。この緑のジャムのようなものは、まさに［女神］ヘベーがゼウスの食卓に供していた不老不死の佳肴（かこう）そのものなのです」と、館の主人は告げる[5]。恐らくハシッシュである。だがフランツは最初、これが何であるか判らない。この島の領主は彼に、次のように語りながら、一匙味わってみるよう勧める。

> もし、あなたが想像力の人間であり、詩人であるならば、やはりこれを味わうことで可能性の壁は消えてしまうでしょう。無限の地平が開け、心も精神も自由になって限りない夢想の領地を彷徨うことができるでしょう。もし、あなたが野心家ならば、この世の偉大さを追い求めるでしょうが、やはりこれを味わえば、１時間後にはあなたは王になれるでしょう、それもフランスだとかスペインだとかイギリスといった、ヨーロッパの片隅に隠れたちっぽけな国の王ではなく、この世の王、宇宙の王、創造の王です[6]。

船乗りシンドバッド――この人物こそエドモン・ダンテスに他ならないのだが――はそのとき、とある中近東の逸話、マルコ・ポーロの旅行記にも登場する「山の老人」とその暗殺教団の伝説を持ち出す。山の老人と渾名（あだな）されたハッサン・イブン・アル＝サッバウ（デュマは小説中で「ハッサン＝ベン＝サバ」と呼んでいる）と、あたかも天上の楽園の如き彼の要塞の庭園、そしてそこに集められ、この人物に対して絶対の服従を誓う狂信的な若者たちの話だ。山の老人は彼らに美しい女性をあてがい、ハシッシュを供してこの上ない逸楽を覚えさせることで、政略的暗殺を躊躇うことなく遂行し、彼の下す命令に対し自らの命も顧みない暗殺集団を作り上げたという。

館の主人の話に好奇心をそそられた男爵は、ハシッシュの驚くべき効果を実際に試してみたくなり、手渡された高純度の上質なペーストを口にする。薬効を倍増させるべくコーヒーを飲んだ後、別室でソファーに横たわりくつろぐ。やがて目眩くような陶酔がフランツを襲い、不可思議なヴィジョンの連続と味わったことのない快楽に翻弄された彼は激しく疲労し、昏睡状態のままその場で気を失ってしまう。翌朝、フランツは朦朧としながらハシッシュの夢から目覚める。「ただ、白日の下のこの現実を前にして、それらのことがすべて少なくとも１年前に実際に起きたことのように思われたのは、それほどまでに彼の見た夢は

[5] *Ibid.*, p. 302（大矢訳、p. 382、山内訳、同上、p. 243）。
[6] *Ibid.*, p. 303（大矢訳、同上、山内訳、同上、p. 244）。

彼の感覚の中で生気に満ち、精神の中に大きな場所を占めていたからである[7]。」一時失った時間と空間の感覚、そして狂乱の一夜の記憶を徐々に取り戻しつつ、洞窟の外に出たフランツは心身共に爽快感を一杯に感じ、新鮮な空気や煌めく朝日、そして清々しい自然を十全に堪能する。

間テクスト性の問題

「デュマは、プルーストより先に、別の時代の『千夜一夜物語』を書きたがっていた」と、ジャン＝イヴ・タディエはフォリオ版『モンテ＝クリスト伯爵』の前書きで語っている[8]。この作品で繰り広げられるオリエント世界の描写を観察すると、彼が幼い頃にこの物語集を愛読して以降、長らく『千夜一夜物語』の影響下にあったであろうことは、例えば『モンテ＝クリスト伯爵』の叙述的枠組の構成のされ方において確認することが出来る[9]。『千夜一夜物語』は、アラブ世界の諸地域で別個に存在していた説話や、他の物語集の中に既に存在していた逸話の寄せ集めで形成され、それが時代と共に、また数々の写本の編纂が行われる度に発展していった。従って、この説話集にある各エピソードは、当然ながら独立性がそれぞれに高い。しかしながら周知のように、大臣の娘シャハラザードが延命の為に、シャハリヤール王の興味を惹くような数奇な物語を 1 編ずつ、夜毎語り聞かせていくといった叙述スタイルを採ることで、相互の関連性の薄い逸話の数々を次々と連鎖的に展開させることに『千夜一夜物語』は成功している[10]。さらに、シャハラザードという語り手により、各エピソードは話の筋とは無関係に、夜（一夜）という単位で恣意的に区切られ、時には数夜をまたぐものとして提示される。物語行為（ナラシオン）のレヴェルにおける『千夜一夜物語』の独創性の 1 つは、まさにこのような夜毎の恣意的な中断にある[11]。このような物語行為（ナラシオン）の中心はもちろ

[7] *Ibid.*, p. 308（大矢訳、p. 389、山内訳、同上、p. 255）。

[8] Jean-Yves Tadié, Préface au *Comte de Monte-Cristo* d'Alexandre Dumas, édition établie et annotée par Gilbert Sigaux, Gallimard, coll. Folio classique, 1998, t. I, p. XX.

[9] 母親や隣人の影響から、ビュフォンの『博物誌』やダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』、『聖書』、そして『千夜一夜物語』を 5、6 歳の頃に既に読み、それらから得た知識を携えて大人たちの会話に加わっていたことを、デュマは自伝『私の回想録』の中で語っている（Dumas, *Mes Mémoires* [1852-1855], Paris, Robert Laffont, coll. Bouquins, 2002, t. I, p. 174-175）。なお、デュマと『モンテ＝クリスト伯爵』の中に表れるオリエンタリスムの問題に関しては、以下の論文でも詳しく論じられているので参照されたい。Jean-Marie Salien, « La subversion de l'orientalisme dans *Le Comte de Monte-Cristo* d'Alexandre Dumas », *Études françaises*, Vol. 36, n° 1, 2000, p. 179-190.

[10] 『千夜一夜物語』の登場人物名や物語名（タイトル名）に関しては、1839 年から 1842 年にかけて刊行された、最も信頼のおける完本とされるカルカッタ第 2 版（マックナーテン版とも呼ばれる）から直接翻訳した、次の邦訳全集の中で使用されている表記に従った。『アラビアン・ナイト』、前嶋信次・池田修訳、平凡社、東洋文庫、1966-1992 年、全 18 巻及び別巻 1。

[11] 例えば以下の論文がこの問題を詳しく分析し論じている。青柳悦子、「『アラビアン・ナイト』における物

ん語り手であるシャハラザードであり、無尽蔵に物語を繰り出していく彼女の存在自体がいわば文学生産の象徴として、トドロフやオースター等に語られることになる[12]。

他方、デュマは各エピソードを「連載もの」として一定の掲載ペースで繰り出し続けているが、物語の展開に対する読者の関心や期待、さらには話の筋を追うことの快楽を毎話毎話で宙吊りにすることで、作品の結末までそれらを繋ぎ留めておくことに成功している。『千夜一夜物語』において展開される物語行為（ナラシオン）と、『モンテ＝クリスト伯爵』が採っている連載形式は、この意味において相似関係にある。寧ろ新聞連載小説というジャンルは、少年期に愛読し、長らくこの説話集の影響下にあったデュマにとって、シャハラザードによる物語行為（ナラシオン）を自身の文学創作において再現することを可能にさせるものであったと言えよう[13]。

また、テクスト内のモティーフや語彙レヴェルにおいても、デュマの小説には『千夜一夜物語』の内容を喚起する表現が複数見受けられ、彼がこの物語集を愛読した痕跡のようなものを確認することが出来る。「変装」や「洞窟」、「隠し財宝」といった『モンテ＝クリスト伯爵』の物語において鍵となるモティーフは、『千夜一夜物語』にある教主（カリフ）ハールーン・アル・ラシードの冒険譚やシンドバードの航海物語、もしくはアリ・ババと 40 人の盗賊の話といった有名な説話を読者に連想させたに違いない。また、デュマが作品中で引き合いに出す『千夜一夜物語』の登場人物、アリ・ババや英雄ハールーン・アル・ラシード、宰相ジャアファルといった名前にしても同様であろう[14]。さらに、作品の主人公であるモンテ＝クリスト自身、作中で「『千夜一夜物語』の中の妖術師」や「『千夜一夜物語』の太守」といったように呼ばれている[15]。極め付けは、マクシミリアン・モレルやリュシアン・ドゥブレ、その他の会食者たちに、モンテ＝クリスト伯爵が誰であるかということを説明する場面で、モールセールが次のような質問をしたことが思い起こされよう。「君は『千夜一夜物語』を読んだことがあるかい[16]？」

『モンテ＝クリスト伯爵』を書くにあたって、『千夜一夜物語』から沢山の着想をデュマが得ていたであろうことは、以上のことからも想像に難くない。とりわけモンテ＝クリスト島に関するエピソードには、異国趣味的（エキゾティック）な印象を読者に喚起させる装置の 1 つとして、『千夜

語行為――テクストにみるその非特定性と多重性――」、『言語文化論集』、第 52 号、筑波大学、2000 年、p. 151-204。

[12] Tzvetan Todorov, « Les hommes-récits », dans *Poétique de la prose*, Seuil, coll. Poétique, 1971, p. 78-91。ポール・オースター、「記憶の書」、『孤独の発明』、柴田元幸訳、新潮社、1991 年（特に p. 201-207）。

[13] Jean-Yves Tadié, *Le Roman d'aventures*, PUF, coll. « Quadrige », 1996, p. 32.

[14] *Le Comte de Monte-Cristo*, éd. cit., p. 207, 569（大矢訳、p. 266, 703、山内訳、第 2 巻、p. 65、第 4 巻、1956 年、p. 66）に各人物名が登場する。なお大矢訳では、「アリ・ババ」→「アリババ」、「ハールーン・アル・ラシード」→「ハルン＝アリ＝ラシド」、「ジャアファル」→「ジアファール」と表記されている。

[15] *Ibid.*, p. 444, 532（大矢訳、p. 546, 654、山内訳、第 3 巻、p. 148, 318）。

[16] *Ibid.*, p. 436（大矢訳、p. 538、山内訳、同上、p. 135）。

一夜物語』の世界を直接的に示唆する語句が、作者デュマにより頻繁に導入されている。イフ城塞からの脱出後、モンテ＝クリスト島に初めて上陸した際、「ファリアが話してくれたアラビアの漁師［アリ・ババ］の話」を思い出し、財宝が隠されている洞窟の扉に向かって、魔法の呪文「開け、ごま！」という文言をダンテスは唱えていた[17]。さらに、島に上陸したフランツが水夫にこの地の領主のことを尋ねる場面を引用してみよう。

「その人間が密輸業者ではないとすると、一体なにをしているのだ？」
「自分の楽しみで旅をしている金持ちの旦那さ」
さてさて、とフランツは考えた、その人物はますます不可思議になってきたぞ、人の言うことがいろいろ違うのだからな。
「で、その首領の名前は？」
「そう訊ねられると、船乗りシンドバッドだと答えるんだ。だが、俺は本名だと思わねえな」
「船乗りシンドバッド？」
「そうだ」
「で、その首領はどこに住んでいるのだ？」
「海の上さ」
「国はどこだ？」
「知らねえな」
「おまえはその人を見たことがあるのか？」
「ときどきな」
「どんな人だ？」
「閣下が自分で判断しなせえ[18]」

そして、シンドバッドの「不思議な宮殿」が未踏の洞窟の中にあり、その扉がアリ・ババの話よろしく、「呪文で」しか開かないことをフランツは聞き出す。その際に彼は思わず、『千夜一夜物語』の世界に足を踏み入れてしまったと呟く。目隠しされたまま2人の男に連れられたフランツ・デピネは、「アリババの洞窟」に入って行く。オリエンタル調の豪華な装飾や調度品で溢れ返るその住処は、フランツ曰く、あたかも「『千夜一夜物語』の続きのような」御殿である[19]。フランツを出迎えたダンテスは、「船乗りシンドバッド」という自身の

[17] *Ibid.*, p. 213（大矢訳、p. 274、山内訳、第2巻、p. 78）。
[18] *Ibid.*, p. 296-297（大矢訳、p. 374-375、山内訳、同上、p. 233-234）。
[19] *Ibid.*, p. 299（大矢訳、p. 377、山内訳、同上、p. 237）。

渾名を名乗る。一方、若い男爵は自身の置かれている不可思議な状況を寧ろ楽しむかの如く、自分を「アラディン」と呼ばせることにする[20]。また、ハシッシュがもたらした狂乱の一夜を過ごしたフランツが翌朝に目覚めた場面においても、語り手が次のように述べている。「前夜から彼は本当に『千夜一夜物語』の主人公であったから、彼がまた洞窟のほうへ引き戻されるのは仕方のないことだった[21]。」

他方、『モンテ＝クリスト伯爵』にある「毒物学」という章の中で展開されている、モンテ＝クリスト伯爵とヴィルフォール夫人の会話場面で、『千夜一夜物語』の内容を喚起させる部分があるので、これにもまた目を向けておこう。その場面で２人は、オリエント地域の生活習慣や様式について、特にその地域に住む人々が日常生活において薬物とどれ程密接な関係にあるかということについて話をしている。彼(か)の地の人々は一般的に毒物学に通じており、時には治療目的、時には暗殺目的、と用途に応じて毒物を意のままに扱うことが出来る、と伯爵は夫人に説明する。その例として彼はミトリダテス王の故事を引き合いに出す。この人物は、来るべき政敵から身を守る為に毒物学を独学で研究し、これを扱うのに長けていたという。伯爵は彼女に、「東方」には「天国を開いてくれる飲み薬から人を地獄に突き落とす薬まで」存在することを教える。好奇心に眼を輝かせながら彼の講釈にじっと耳を傾けていたヴィルフォール夫人は、この人物が話してくれた未知の世界オリエントに、『千夜一夜物語』で展開される空想世界を、自分の想像の中で重ね合わせる。

> 「そうですわ、伯爵さま」と若い妻は口を開いた、「あなたが人生の一部を過ごされたその東方の社会は、その美しい国から私たちに伝わったおとぎ話のように、すばらしい社会なのですね？人が１人抹殺されても罰せられないのですね？それでは、ガラン氏の描くバクダッドやバッソラは現実にあるのですね？そういう社会を統治し、フランスでいう政府を構成する太守(スルタン)や大臣(ヴィズィール)は実際にハルン＝アリ＝ラシドやジアファールで、彼らは毒殺者を赦すばかりか、もし、その犯罪が独創的ならば、彼を総理大臣に取り立てたり、徒然を紛らすためにその話を金の文字で彫らせたりするのですか[22]？」

エドモン・ダンテスとエロイーズ・ド・ヴィルフォールによるこのような言葉の遣り取りを通して、『千夜一夜物語』の世界と媚薬と毒物――我々読者はこれらをそれぞれ、

[20]「『私のほうは』とフランツは答えた、『アラディンと同じ立場になるのに足りないのは魔法のランプだけですから、とりあえず、アラディンと呼んでいただいてなんの支障もないでしょう。そうすれば、私たちは東洋の世界に留まることになりますからね。実は、私はなにか気前のいい霊のおかげで東洋に連れてこられたと考えたいのです』」（*ibid*.［大矢訳、p. 378、山内訳、同上、p. 238］）。

[21] *Ibid*., p. 310（大矢訳、p. 391、山内訳、同上、p. 258）。

[22] *Ibid*., p. 569-570（大矢訳、p. 703、山内訳、第４巻、p. 66）。

異国趣味（エグゾティスム）と生と死といった言葉で換言しても良い――との間に確立される1つの観念連合を読み取ることが可能なように思われる。実際にこのような観念連合は、小説の後半部で展開される話の筋にとって非常に重要な要素となってくる。ヴィルフォール夫人は、伯爵を介して得た毒物学の知識を実践に移してしまい、サン＝メラン侯爵夫妻たちを毒殺してしまうからだ。ただし、ヴァランティーヌだけが運の良いことに死を免れることになるのだが。

版（エディッション）の問題

『千夜一夜物語』のフランス語訳には幾つかの版が存在する。その中でも19世紀から20世紀前半にかけての読者にとって、アクセスが可能もしくは比較的容易であったものとしては、3つの版がつとに有名である。アントワーヌ・ガラン（1646-1715）による版、ギヨーム＝スタニスラス・トレビュシヤン（1800-1870）による版、そしてジョゼフ＝シャルル・マルドリュス（1868-1949）による版である。

1704年から1717年にかけて全12巻で刊行されたガランによる『千夜一夜物語』のフランス語訳は、19世紀に至るまで版を重ねる程の大成功を収めた本としてよく知られている。「ガラン版」とも呼ばれるこの刊本は、14世紀頃（15世紀頃という説も有り）に刊行されたシリア系アラビア語写本3巻ないし4巻分が底本とされ、マロン派教徒のハンナ・ディアーブという人物から聞き取ったアラブの民話の数々がそこに付け加えられたものである[23]。アラブ世界への異国趣味的（エキゾティック）な憧憬が多分に含まれた彼の『千夜一夜物語』は、ルイ14世治下のフランスに熱狂的なブームを巻き起こし、この物語集を初めて西欧世界に紹介した作品として、またそれまで西欧世界で読まれていた文学とは異質の在り方を示す奇異で偉大な作品として、格別な位置付けを与えられることになる。

バルベ・ドールヴィイの友人であり、オリエント学愛好家にして歴史家のトレビュシヤンは、カーンの公立図書館の副司書であった。彼はヘブライ語やトルコ語、アラビア語、ペルシャ語を独学で修得し、地元カーンの歴史書やモーリス・ド・ゲランに関する著作等も残している。そのような彼により1828年に発表された『千夜一夜物語の未発表物語集』（全3巻）は、1804年から1806年にかけて出版されたヨゼフ・フォン・ハンマー＝プルグシュタル（1774-1856）のドイツ語訳をフランス語に翻訳した、いわば重訳版である[24]。ハンマー

[23] Sylvette Larzul, *Les Traductions françaises des* Mille et Une Nuits. *Étude des versions Galland, Trebutien et Mardrus*, Paris, L'Harmattan, 1996, p. 24-29. なお、ガランが底本としたとされる写本の1つは、パリの国立図書館の司書であるエルマン・ゾータンベールにより再発見され、現在、同図書館に保存されている。

[24] もっとも、ハンマー＝プルグシュタル自身によるフランス語訳も1823年から1824年にかけて発表されはしたものの、それまでの約20年間、フランスでは未刊のままであった。なおトレビュシヤンは、イギリス

＝プルグシュタル－トレビュシヤン版は、『千夜一夜物語』の主要な写本の１つであるカイロ写本を底本としているようで、『千夜一夜物語の未発表物語集』という題名が示すように、ガラン版には収録されていなかった話で全編が構成されている。だがこの翻訳版は、ピエール・アジュロン曰く、オリエント学の専門家でもなければ、秀でた語学力も持ち合わせていない、地方の一図書館員による趣味道楽の域を出ないものであった[25]。当時若かったトレビュシヤンの翻訳文体に関しては、その才能の片鱗を感じさせる何かがあるものの、収録されたエピソードの選別には訳者の個人的な好みの偏りが見られ、以上のような理由もあってか、18 世紀前半に世に出てその後も版を重ね続けたガラン版と異なり、余り普及しなかった[26]。

他方、マラルメやエレディア、カテュール・マンデスらのサロンの常連であり、文壇に多くの知己を持っていたマルドリュスは、海運会社メサジュリ・マリティーム（フランス郵船）に医師としても勤務していた人物であった。1899 年から 1904 年にかけて発表され、ジッドやロダンらに愛読され、カルカッタ第２版を典拠とした英訳本バートン版と共に、現在世界で最も読まれているものとしてよく知られているこの人物の版は、19 世紀中に出版された幾つかの版、特に最も重要なアラビア語原典版の１つであるブーラーク版（1835 年にカイロ郊外のブーラーク印刷所より刊行）を底本としているのだが、このマルドリュス版もまた、原典とは無関係の、単にオリエント地域で流布していた説話を多く含んでおり、また比較的自由な訳出を行っている版として、今日では認知されている。

『モンテ＝クリスト伯爵』、特に「毒物学」の章において１つの観念連合が成立していることは前（さき）に確認した通りだが、『千夜一夜物語』においても実際に麻薬を取り上げた話は存在している。例えばトレビュシヤン版には、自分の夫である教主（カリフ）、ハールーン・アル・ラシードの不貞を疑ったズバイダ正妃が、その浮気相手を多量の阿片――ハシッシュではない――で毒殺する計画を立てこれを実行に移そうとする場面が、『漁師にして教主（カリフ）であり教主（カリフ）にして漁師の話』というエピソードの中に存在する[27]。他方、マルドリュス版においても、「巧みな諧謔と愉しい頓知の集い」の中に収録されている２つのエピソード――「2 人のハシーシュ食らいの物語」とその後日談にあたる「ハシーシュ食らいの判決」――の中でハ

の外交官でコンスタンティノープルに長期間駐在した後にカーンに移住した、知人のジャン・スペンサー・スミス（1769-1845）を介して、このオーストリアの碩学やその刊本を知ったようである（Jean-Luc Piré, *G.-S. Trebutien*, Préface par J.-Cl. Polet, Caen, Louvain-neuve, Hors-série des *Annales de Normandie*, 1985, p. 19-20）。

[25] Pierre Ageron, « Les manuscrits arabes de la bibliothèque de Caen », dans *Annales de Normandie*, 58e année, n° 1-2, 2008, p. 88.

[26] Jean-Luc Piré, *op. cit.*, p. 29.

[27] *Contes inédits des Mille et Une Nuits*, extraits de l'original arabe par J. de Hammer, traduits en français par G.-S. Trebutien, Paris, Librairie orientale de Dondey-Dupré père et fils, 1828, t. II, p. 302.

シッシュが取り上げられている[28]。最初のエピソードでは、ハシッシュを嗜食する漁師と法官（カーディ）の馬鹿馬鹿しく下品な言行が描かれている。ハシッシュを食した彼らは、太守（スルタン）（岩波版では帝王（スルターン）と表記）の面前で奇行を働いてしまったのだが、この漁師が太守（スルタン）（帝王（スルターン））に面白い話を幾つか披露したことが幸いして無罪放免になったばかりか、このお陰で大宰相（グラン・ヴィズィール）（岩波版では総理大臣と表記）にまで取り立てられたという話である。2つ目のエピソードは、このハシッシュ食いの漁師、今や大宰相（グラン・ヴィズィール）になった彼のところに持ち込まれた厄介な訴訟話を、彼が機転を利かせて解決してしまう、といった内容である[29]。

ガラン版『千夜一夜物語』

しかしながら、デュマが愛読したという意味において有力な版と思われるアントワーヌ・ガランによる版には、その類の話は見当たらない。そのことには、『千夜一夜物語』に対してガランが採っていた翻訳スタイルが大きく関与していると思われる。1822年にノディエがガラン版『千夜一夜物語』に対して寄せた作品解題があるのだが、当時ほとんど無名であったこの翻訳者をその冒頭で紹介しているので、これを見てみたい[30]。非常に勤勉で謙虚だった碩学ガランは、オリエント文化の研究に学者人生を捧げ、これに関する知識の普及伝播に多大な貢献を果たした、と読者にノディエは紹介する。

> 誰でも知るような立派な称号を持ち合わせていないにも関わらず、口の端に上れば尊敬に値しかつ懐かしい記憶の数々が必ず呼び起こされる、そのような人物の名がある。長く学究に勤しみはしたものの、謙虚で表舞台に出ることをせずにひっそりと送った人生を、当時の珍しくかつ余り評価されなかったある特定の学問の探究に捧げた勤勉な学者の名がそうである、この人物は他の人たちの役に立ちあるいは喜んでもらうことに些かの光栄をそこから引き出すことのみを目指していたのだ。

---

[28] *Le Livre des Mille et Une Nuits*, traduit par le Dr. J.-C. Mardrus, Paris, Robert Laffont, coll. Bouquins, 1980, t. II, p. 467-495. 両エピソードは、このマルドリュス版を底本とした次の邦訳でも読むことが出来る。『完訳 千一夜物語』、豊島与志雄、渡辺一夫、佐藤正彰、岡部正孝訳、岩波文庫（第10巻、1988年、p. 210-289）。

[29] 他方、カルカッタ第2版を底本としたプレイヤッド版には、『ハシーシュ食いの話』という、別の他愛もない笑い話が収録されている（*Les Mille et Une Nuits*, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, 2005, t. I, p. 675-696［特に p. 675-677 を参照のこと］）。これは同じくカルカッタ第2版から主に訳出した前嶋・池田訳『アラビアン・ナイト』（前掲版）の中でも読むことが可能である（第5巻、1968年、p. 272-279）。

[30] Nodier, « Notice sur Galland », dans *Les Mille et Une Nuits. Contes arabes*, traduits en français par Galland, Galliot, 1822, t. I, p. ix-xxij. ノディエによるこのガラン版『千夜一夜物語』の解題は、次の書に全文が再録されている。*Les Mille et Une Nuits. Contes arabes*, traduits par Galland, Bordas, coll. Classiques Garnier, 1988, t. I, p. I-IX.

尊敬すべきアントワーヌ・ガランの名がまさにそれである、『オリエントの創意溢れる物語集』の卓越した翻訳は彼のお陰であり、文士としてかつ学者としての自分の名声の一部を想像力が生み出す朗らかで不可思議な世界を描いた『千夜一夜物語』と称されるあの作品に注ぎ込むという名案がもしも彼に浮かばなかったならば、その飽くなき仕事は世間にほとんど知られていないであろう[31]。

当解題の筆者はガランの翻訳について、かなり「古典的で」、原典には些か不忠実であると評した[32]。事実、『千夜一夜物語』には官能的な描写や反道徳的な場面が多いことは広く知られているが、そのようなものや余りに露骨な表現がガランのフランス語版では翻訳者の判断により削除され、これに代わる場面や表現が恣意的に差し込まれている。ただ、彼による『千夜一夜物語』の訳業自体についてノディエは高い評価を与えている。例えば、ガランが行ったオリジナル・テクストに対する一連の介入について、訳者は「あれらの魅力的な作品から度を越した言い回しや、読む者をうんざりさせるような細かい描写、無駄な繰り返しの数々を削除した」のだと好意的に解釈した上で、ガラン版に対して低い評価を与えた当時の学者たち、「オリジナル・テクストに対して盲目的なまでに忠実」なだけであった彼らに対してノディエは反駁を加えている。そしてガランの文体を賞讃し、「能弁ではあるが冗漫でなく、自然で口語的ではあるも、締まりがないところもなければ卑俗なところもなく、文体の流暢さがもたらすあの格調の高さを全く欠くことがない」とそれを表現している。

ノディエの解説にもあるように、ガラン版『千夜一夜物語』では、とりわけ倫理道徳的な面で彼の趣味に合わないようなもの、例えば性的表現や社会道徳に反するような描写が削除され、内容も当時の西欧世界の読者が理解し、また受け入れ易いようなものに結果的に変化してしまっている[33]。例えば、「船乗りシンドバッド」のエピソードの着想源である可能性が極めて高い『千夜一夜物語』の船乗りシンドバードの物語群も、他の刊行版と比べ、脱線的な内容のみならず、官能的な場面がガラン訳にはほとんど含まれておらず、結果的に冒険話ばかりで物語が構成されている[34]。さらに、『千夜一夜物語』を代表するアラーッ・ディーンやアリ・ババの物語群は、アラビア語原典には元来存在していなかったようで、訳本の内容を多様化させる意図の下、ガランにより恣意的に挿入されたようだ[35]。シンドバードの航海

[31] Nodier, « Notice sur Galland », *ibid*., Bordas, coll. Classiques Garnier, p. I.

[32] *Ibid*., p. VIII.

[33] Sylvette Larzul, *op. cit*., p. 115.

[34] La notice par Jean-Paul Sermain des *Mille et Une Nuits. Contes arabes*, traduction d'Antoine Galland, Paris, Flammarion, coll. GF, 2004, t. I, p. 15.

[35] しかし、訳者ガランによる創作を疑われたこの２つの物語も、その出自（典拠）が二転三転し、今現在ではそれらのアラビア語原典は未発見のままである。このような『千夜一夜物語』研究の動向に関しては、例えば次の日本語論文が簡潔にまとめている。西尾哲夫、「アラビアン・ナイト研究の問題と展望」、『オリ

談にしてもこれと同様で、元々『千夜一夜物語』には入っておらず、独立した説話として存在していた。このような経緯を鑑みれば、デュマがアラビア語原典に直接的ないし間接的にアクセスした可能性は、取り敢えずほぼ無いと言えよう。

またハシッシュという、当時においても反社会的であった毒物に関する記述部分が万一アラビア語原典に存在していたとしても、フランス語訳『千夜一夜物語』の制作過程でガランの判断の下に削除されてしまった可能性は大いにあるだろう。逆に、たとえ薬物を取り上げた話が収録されているにせよ、マルドリュス版は 19 世紀末に刊行されたものであることから、デュマが『モンテ＝クリスト伯爵』を執筆するにあたり、この版を参照したと考えるのはほぼ不可能である。だからといって、デュマがトレビュシヤン訳から着想を得たと判断するのも些か性急な話である。実際問題として、このことを裏付けるような証拠や証言が何よりもまず不足している。さらに次のような証言もある。『私の回想録』の中に、『千夜一夜物語』全集の中の 1 冊、「アラーッ・ディーンと魔法のランプ」の物語が収録された巻を、とある婦人に貸した逸話が書き留められている。

> 私は『千夜一夜物語』を［全巻］持っていたのだが、「［アラーッ・ディーンと］魔法のランプ」のみを収録した巻が 1 冊半端になっていたので、それを彼女にそのとき渡した。彼女は 1 週間これに読み耽った後、私にそれを返してその続編を催促したので、翌日に持ってくることを彼女に約束した。私は同じものを貸し与えたのだが、前回とは違った心持ちで、そしてこのことを言っておかねばならないが、前回とは別の楽しみをもって、彼女はそれを相も変わらず読んでいた。
> こうしたことがおよそ 1 年間続いたが、その間に彼女は同じ本を 52 回繰り返して読んだのである[36]。

表題に『千夜一夜物語の未発表物語集』と銘打っているように、トレビュシヤン版は、これ以前に長く普及していたガラン版の補遺として位置付けられるようなものであった。実際、上に引用したエピソードで話題になっている、アラーッ・ディーンの話はおろか、シンドバードの冒険譚もアリ・ババの物語も、トレビュシヤン版には収録されていない。故に、デュマが幼い頃に触れ、自身の創作の為に参照したと推察される翻訳は、当時広く世に出回っていたガラン版であり、ハシッシュの件（くだり）に関しては、彼の創作によるものと判断して良いと思われる。

エント』、日本オリエント学会、第 37 号（2）、1994 年、p. 223-236。

[36] Dumas, *Mes Mémoires*, éd. cit., p. 175.

デュマの『モンテ＝クリスト伯爵』が、ガラン版『千夜一夜物語』の虚構世界の強い影響下において創作されたことは、テクスト・レヴェルにおいても、またソース（版（エディッション））・レヴェルにおいても、以上の検証から明らかである。しかし、デュマの作品における、かように明瞭な『千夜一夜物語』への示唆ないし言及を、幼少の頃にこの説話集を愛読した彼の読書体験の表れと単に解釈するに留めてはならないだろう。端的に言うならば、『モンテ＝クリスト伯爵』の作者であるデュマは、小説の展開に読者を引き入れる装置の１つとして、『千夜一夜物語』に対して当時の読者が共通して抱いていた印象――エピステーメーと換言しても良い――を利用したのではなかろうか。そうであるとしたならば彼の目論見は、シャハラザードがシャハリヤール王に物語を夜毎に話し聞かせて延命を図ったように、未知なる世界オリエントに対して当時の読者が抱いていた異国趣味的（エキゾティック）な好奇心を刺激すると同時に、その文学的想像力を喚起させながら、新聞連載の最終話まで読者の関心を繋ぎ留めることに成功したと言えよう。